遠い友　心の旅

市川桃子

2018年11月6日　　神奈川近代文学館

主催　神奈川県漢詩連盟

「有朋自遠方來、不亦楽乎」　『論語』「学而篇」

（朋（とも）あり　遠方（えんぽう）より来（き）たる　また楽（たの）しからずや）

【訳】友達が、遠くから訪ねて来てくれたら、それも楽しいではないか。

（『論語』は、孔子（前五五一？～前四七九）の言行録。）

この句の解説に、次のようなものがあります。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「不思議なことに、いつの間にやら、なるほどこの句はいい句らしいぞ、と思うようになった。ピリリと心に突き刺さるような鋭さもなければ、にやりとほくそ笑ませるようなエスプリもないが、まるで空気か水か麦飯のように、ふんわりと温かく、しみじみとした深い味わいをたたえているようだと思いだした。

あるいはまた、陽光をたっぷりと吸いこんだ夜具のほのかなぬくもりにも似たものであろうか。（中略）

朋が遠方からやってくることのうれしさもそうした種類のもので、世務にすり切れた感性の、ともすれば見失いがちになるものであろう。このような喜びは、年をとり、派手やかな悦びもうすらぐころになって、はじめて理解されてくるのかもしれない。」

（合山究「『論語』の読み方と解釈」『論語の世界』中央公論社　所収）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

素敵な解説ですね。

では、この句の「朋（とも）」とは、どういう友でしょう。諸説ありますが、朱子は、「朋、同類なり」と解釈しています。これによれば、「朋」とは、いつも一緒に居る人、ではなく、志を同じくする人、心が通う人、共感する人、でしょう。

今日は、心の通う友をたずねて、旅に出ましょう。

戰城南　（前漢の鎮魂歌）

戰城南	城南に戦い	(zhàn chéng nán)
死郭北	郭北に死す	(sǐ guō běi)
野死不葬	野に死して葬られずんば	(yě sǐ bú zàng)
烏可食	烏食らうべし	(wū kě shí)
為我謂烏	我が為に烏に謂え	(wèi wǒ wèi wū)
且為客豪	且く客のために豪せよと	(qiě wèi kè háo)
野死諒不葬	野に死して諒に葬むられず	(yě sǐ liàng bù zàng)
腐肉安能去子逃	腐肉安んぞ能く子を去りて逃れん	(fǔròu ānnéng qùzǐtáo)
水声激激	水声　激激たり	(shuǐ shēng jī jī)
蒲葦冥冥	蒲葦　冥冥たり	(pú wěi míng míng)
梟騎戰鬪死	梟騎戰鬪して死し	(xiāo jì zhàn dòu sǐ)
駑馬徘徊鳴	駑馬徘徊して鳴く	(nú mǎ pái huái míng)

【訳】　「城南に戦う」

城郭の南に戦って、城郭の北で死んだ、

野に倒れて葬られなければ、烏が我が肉を食らっただろう、

私のかわりに烏に言ってくれ、しばらく私のために豪いてくれと。

野に死んで、埋葬されることもないのだから、

私の肉はお前たちから逃れることなどできないのだ。

水音がはげしく響く。　蒲や葦が小暗くおい茂る。

騎士が戦って死ねば、主を失った馬はさまよって、いななくばかりだ。

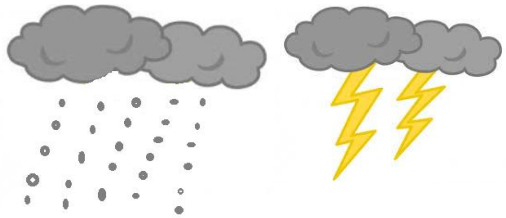
上邪（前漢の民歌）

上邪　　上邪(じょうや)　　(shàng yé)
我欲與君相知　　我(われ)君(きみ)と相(あ)い知(し)り　　(wǒ yù yú jūn xiāng zhī)
長命無絶衰　　長命絶(ちょうめいた)え衰(おとろ)うること無(な)からんと欲(ほっ)す　　(cháng mìng　wú jué shuāi)

山無陵　　山(やま)に陵(おかな)無く　　(shān　wú líng)
江水為竭　　江水(こうすいため)為(つ)に竭き　　(jiāng shuǐ　wèi jié)
冬雷震震　　冬(ふゆ)に雷(かみなりしんしん)震震として　　(dōng léi　zhènz hèn)
夏雨雪　　夏(なつ)に雪雨(ゆきふ)り　　(xià yǔ xuě)
天地合乃敢與君絶　　天地(てんちがっ)合して乃(すなわ)ち敢(あえ)て君(きみ)と絶(た)えん　　(tiān dì hé nǎi gǎn yú jūn jué)

【訳】　天よ　　（恋人との仲を天に誓う）

天よ
私はあなたと知り合って、
いつまでも別れないでいたいと思う。
山に稜線が無くなって
そのために河の水も枯れ
冬に雷がゴロゴロとなり
夏に雪が降り
天と地が合わさってしまったら、そうしたらあなたと別れましょう。



飲酒十二首　其五

陶淵明

結廬在人境　廬を結んで人境に在り　(jié lú zài rén jìng)
而無車馬喧　而も車馬の喧しき無し　(ér wú chē mǎ xuān)
問君何能爾　君に問う　何ぞ能く爾るやと　(wèn jūn hé néng ěr)
心遠地自偏　心遠ければ地　自ら偏なり　(xīn yuǎn dì zì piān)
採菊東籬下　菊を採る　東籬の下　(cǎi jú dōng lí xià)
悠然見南山　悠然として南山を見る　(yōu rán jiàn nán shān)
山氣日夕佳　山気　日夕に佳し　(shān qì rì xī jiā)
飛鳥相與還　飛鳥　相い与に還る　(fēi niǎo xiāng yú huán)
此中有**真意**　此の中に真意有り　(cǐ zhōng yǒu zhēn yì)
欲辯已忘言　弁ぜんと欲すれば已に言を忘る　(yù biàn yǐ wàng yán)

【訳】　「酒を飲む」十二首　その五

小さな家を構えて人里に住んでいる。
人里にいても馬や馬車がやかましくやってくるということはない。
君に尋ねよう。どうしてそうなのかと。　心持ちが俗世間から遠くにあれば、住んでいる所も自然と世間から遠ざかるのだ。
東の垣根の下で菊の花を採り、ゆったりと南山を眺める。
夕暮れの山の気配はまことに美しい。鳥が連れ立ってねぐらに帰っていく。
この中に**真意**があるのだ。
では、どこに真意があるのかと理論だって述べようとすると
表す言葉をもう忘れている。

飲酒　其二（部分）

不賴固窮節　(bú lài gù qióng jié)
百世當誰傳　(bǎi shì dāng shéi chuán)

【訳】貧窮した生活を守っていく気概がなければ、百代の後までは伝えられないだろう。

飲酒　其三（部分）

一生能復幾　(yì shēng néng fù jǐ)
倏如流電驚　(shū rú liú diàn jīng)
鼎鼎百年内　(dǐng dǐng　bǎi nián nèi)
持此欲何成　(chí cǐ yù hé chéng)

【訳】一生というのはどれほどの時間か。まるで稲妻がひらめくほどの短い時間だ。どんどんと過ぎていく百年の生涯のなかで、評判を大切に守っても、いったい何になるのか。

（限られた百年の生涯だけを大切にしてはいけない。）

飲酒　其四（部分）

托身已得所　(tuō shēn　yǐ dé suǒ)
千載不相違　(qiān zǎi　bù xiāng wéi)

【訳】信頼できる居場所やものを見つけたら（一生を越えて、）千年でも大切に守らなければならない。

飲酒　其十一（部分）

雖留身後名　身後に名を留むと雖も　(suī liú shēn hòu míng)

一生亦枯槁　一生　亦た枯槁す（中略）　(yì shēng yì kū gǎo)

死去何所知　死し去れば何の知る所ぞ　(sǐ qù hé suǒ zhī)

稱心固為好　心に称うは固より好しと為す　(chèn xīn gù wéi hǎo)

【訳】名を残した立派な人でも、一生、潤いのない生活を送ってはつまらない。（略）死んだらおしまいだ。心にかなう生き方をするのがよい。

飲酒　其十五（部分）

若不委窮達　若し窮達に委ねざれば　(ruò bù wěi qióng dá)

素抱深可惜　素抱　深く惜しむ可し　(sù bào shēn kě xī)

【訳】運命の浮き沈み（困窮や栄達）に身をゆだねなければ、自分の平生の志（素抱）について深く後悔することになる。（本来の気持ちを大切にして、運命に身をゆだねよう。）

飲酒　其二十（部分）

終日馳車走　終日　車を馳せて走るも　(zhōng rì chí chē zǒu)

不見所問津　津を問う所を見ず　(bú jiàn suǒ wèn jīn)

【訳】一日中、車で駆け回っても、どこで渡し場を尋ねたらよいかわからない。（人生について考えようとしても、どこに行ったらよいのか、たずねる所さえわからない。）

形贈影　　形影に贈る　　陶淵明

天地長不没　天地長えに没せず　(tiān dì cháng bú mò)
山川無改時　山川改むる時なし　(shān chuān wú gǎi shí)
草木得常理　草木常理を得て　(cǎo mù dé cháng lǐ)
霜露榮悴之　霜露之を栄悴せしむ」　(shuāng lù róng cuì zhī)
謂人最靈智　人は最も霊智なると謂うも　(wèi rén zuì líng zhì)
獨復不如茲　独り復た茲くの如からず　(dú fù bù rú cí)
適見在世中　適ま世の中に在ると見るも　(shì jiàn zài shì zhōng)
奄去靡歸期　奄ち去って帰る期靡し」　(yǎn qù mí guī qī)

奚覺無一人　奚んぞ覚らん一人無きを　(xī jiào wú yì rén)
親識豈相思　親識も豈に相思わんや　(qīn shí qǐ xiāng sī)
但餘平生物　但だ平生の物を余せるのみ　(dàn yú píng shēng wù)
舉目情悽洏　目を挙ぐれば情は悽而たり」　(jǔ mù qíng qī ér)

我無騰化術　我に騰化の術無ければ　(wǒ wú téng huà shù)
必爾不復疑　必ず爾らんこと復た疑わず　(bì ěr bù fù yí)
願君取吾言　願わくは君吾が言を取り　(yuàn jūn qǔ wú yán)
得酒莫苟辭　酒を得なば苟しくも辞するなかれ　(dé jiǔ mò gǒu cí)

【訳】　「体が影におくる言葉」

天地自然は 永久になくならない。山川も 姿が変わることはない。草木は 自然の法則に従って、霜や露が 草木を茂らせたり しぼませたりする。

人間は最も霊智な生き物といわれているけれど、人間だけは こんなふうではない。たまたま世の中に生きているとはいえ、すぐに死に去って 再び戻ることはない。

いつの間にか一 人いなくなっても 気づくものはおらず、親せきや友人も、いつまでも偲んでくれるわけではない。 後にはふだん使っていた物が残されるばかりだ。ここに目を向けると、悲しくてたまらなくなる。

私には仙人となって天に昇っていくような仙術(騰化術)はないのだから、そうなるのは仕方のないことなのだ。だから我が影よ、私の言うことに耳を傾け、酒があったら 決して辞退してはいけない。

【つまり・・・・】　人は、はかないものだ。 → 酒を飲もう。楽しく過ごそう。

影答形　　陶淵明

存生不可言　　(cún shēng bù kě yán)
衛生每苦拙　　(wèi shēng měi kǔ zhuō)
誠願游崑華　　(chéng yuàn yóu kūn huā)
邈然茲道絶」　　(miǎo rán cí dào jué)
與子相遇來　　(yú zǐ xiāng yù lái)
未嘗異悲悦　　(wèi cháng yì bēi yuè)
憩蔭若暫乖　　(q ì yīn ruò zàn guāi)
止日終不別」　　(zhǐ rì zhōng bù bié)
此同既難常　　(cǐ tóng jì nán cháng)
黯爾俱時滅　　(àn ěr jù shí miè)
身沒名亦盡　　(shēn mò míng yì jìn)
念之五情熱」　　(niàn zhī wǔ qíng rè)
立善有遺愛　　(lì shàn yǒu wèi ài)
胡爲不自竭　　(hú wéi bú zì jié)
酒云能消憂　　(jiǔ yún néng xiāo yōu)
方此何不劣　　(fāng cǐ hé bú liè)

影形に答う

生を存するは言う可からず
生を衛るすら毎に拙なるに苦しむ
誠に崑華に遊ばんと願えども
邈然として茲の道絶えたり
子と相い遇いてより来かた
未だ嘗つて悲悦を異にせず
蔭に憩えば暫く乖るるが若きも
日に止まれば終に別れず
此の同にするは既に常なり難し
黯爾として俱に時に滅ぶ
身没すれば名も亦た尽く
之を念えば五情熱す
善を立つれば遺愛有らん
胡爲れぞ自ら竭くさざる
酒は能く憂いを消すと云えども
此に方ぶれば何ぞ劣らざらん

【訳】「影が肉体に答えた言葉」

いつまでも生きていられないことは言うまでもない。つつがなく生きることにさえ、いつも苦労している。あの、崑崙山や華山という仙山に行こうと思っても、はるか遠くにあって、そこへ行く道も無い。

私（影）があなた（形）と出会って以来、今日までいつも悲しみや喜びを共にしてきた。日陰で休めばしばらく離れ離れになるようだが、日向に居ればやはり一緒だ。

だがこうしていつまでも一緒にいられるわけではない。やがて暗闇につつまれて共に滅ぶ時が来る。身体が滅びれば名前も残らない。このことを思うと心の中が煮えたぎる。

日ごろ善行を積んでおけば　死後も愛が残される（遺愛）だろう。なぜ真心を尽くさないのか。酒は愁いを消してはくれるが、今言ったことには及ばない。

【つまり…】人は、はかないものだ。　→　善行を積もう。（死後に愛や名を遺そう）

神釋　　陶淵明

大鈞無私力	大鈞　力を　私　すること無く	(dà jūn　wú sī lì)
萬理自森著	万理　自ずから森として著わる	(wàn lǐ　zì sēn zhù)
人爲三才中	人の三才の中爲るは	(rén wéi　sān cái zhōng)
豈不以我故」	豈に我を以ての故ならずや	(qǐ bù　yǐ wǒ gù)
與君雖異物	君と異物なりと雖も	(yú jūn　suī yì wù)
生而相依附	生れながらにして相い依附す	(shēng　ér xiāng yī fù)
結托善惡同	結托して善惡同じ	(jié tuō　shàn è tóng)
安得不相語」	安んぞ相い語らずを得んや	(ān dé　bù xiāng yǔ)
三皇大聖人	三皇は大聖人なるも	(sān huáng　dà shēng rén)
今復在何處	今復た何処にか在る	(jīn fù　zài hé chù)
彭祖壽永年	彭祖は寿永年なるも	(péng zǔ　shòu yǒng nián)
欲留不得住	留らんと欲して住まるを得ず	(yù liú　bù dé zhù)
老少同一死	老少同に一しく死し	(lǎo shào　tóng yī sǐ)
賢愚無復數」	賢愚　復た数うる無し	(xián yú　wú fù shǔ)
日醉或能忘	日に酔えば或いは能く忘れんも	(rì zuì　huò néng wàng)
將非促齡具	将た齢を促す具に非ずや	(jiāng fēi　cù líng jù)
立善常所欣	善を立つるは常に欣ぶ所なるも	(lì shàn　cháng suǒ xīn)
誰當爲汝譽」	誰か当に汝が誉と為すべき	(shéi dāng　wéi rǔ yù)
甚念傷吾生	甚だしく念えば吾が生を傷つけん	(shèn niàn　shāng wú shēng)
正宜委運去	正に宜しく運に委ねて去るべし	(zhèng yí wěi yùn　qù)
縱浪大化中	大化の中に縱浪し	(zòng làng　dà huà zhōng)
不喜亦不懼	喜ばず亦懼れず	(bù xǐ　yì bú jù)
應盡便須盡	応に尽くべくんば便ち須からく尽きしむべし	(yīng jìn　biàn xū jìn)
無復獨多慮	復た独り多く慮ること無かれ	(wú fù　dú duō lǜ)

【注】大鈞‥天。造物主。「鈞」は、陶器をつくるろくろのこと。天地創造は、ろくろで器をつくるのに似ているところから。三才‥天地人。天・地・人は、宇宙を構成する。

【訳】　「心がときあかす」

万物を生成する巨大な轆轤（ろくろ）である造物主は、その力を私的に使うことはない。
したがって万物の原理は自然に厳然とあらわれる。
人は、天地人という三才の真ん中に位置しているが、
それは私という精神があるからではないか。
形と影よ、私は君たちとは別のものであるが、
生まれてからずっと寄り添っている。
お互いに結びついて善悪を共にしているからには、
ひとこと言わずにはいられない。」
上古の伏羲・神農・黄帝という三人の帝王は大聖人であったけれど、
今はもはやこの世界のどこにもいない。
八百年も生きたと言われる彭祖は永遠の寿命があるとされたが、
結局、この世に止まることはできなかった。
老いも若きも結局は同じように死んでいく。
死の前では賢いとか愚かとか言い立てることもない。」
形よ、毎日酔っていれば、愁いを忘れられるかもしれないが、
それはかえって命を縮めるもとになるのではないか。」
影よ、善行を積むのはなるほどいつも喜ばれることではある。
しかし、誰が君のためにそれを誉めてくれるというのか。」
あまり深く思い詰めるのは、かえって自分の命を損なうことになる。
ただ大自然の運行のままに任せてゆくのがよい。
変転きわまりない宇宙の運行に身を任せてただよい、
目の前の現象に喜んだり恐れたりせずに平静でいるがよい。
この命がどうしても尽きてしまうなら、尽きさせればよい。
さあ、独りでくよくよと心を煩わすことはない。
【つまり・・・】　人は、はかないものだ。
酒ばかり飲んでいれば身体をこわすかもしれない。
善行を積んでも、名誉を得ることはないかもしれない。
死を超えて、大化（宇宙）の運行に心身をゆだねよう。

閑情賦　（中間の部分）　陶淵明

願在衣而為領　願わくは衣にありては領と為り
承華首之餘芳　華首の余芳を承けん
悲羅襟之宵離　悲しいかな羅襟の宵に離るれば
怨秋夜之未央　秋夜の未だ央きざるを怨む

願わくば、衣ならば襟となって、美しい首の残り香をかいでみたい。
悲しいことには、衣は夜には脱ぎ捨てられ、秋の長夜を耐えなければならない。

願在裳而為帶　願わくは裳にありては帯となり
束窈窕之纖身　窈窕の纖身を束ねん
嗟温良之異氣　嗟温良の気を異にすれば
或脱故而服新　或は故きを脱ぎて新しきを服る

願わくば、衣裳ならば帯となって、か細い腰を締め付けてみたい。
だが気候が変われば、古い衣は脱ぎ捨てられて新しい衣を着るだろう。

願在髪而為澤　願わくは髪にありては沢となり
刷玄鬢於頹肩　玄鬢を頽肩に刷かん
悲佳人之屢沐　悲しいかな佳人屢しば沐し
從白水以枯煎　白水に従りて以て枯煎するを

願わくば、髪に塗る油（沢）となって、しどけない肩のあたりで黒髪をとかしてみたい。
悲しいことには、そなたはたびたび沐浴して、水で洗い流してしまうだろう。

願在眉而為黛　願わくは眉にありては黛となり
隨瞻視以閒揚　瞻視に隨って以て閒かに揚がらん
悲脂粉之尚鮮　悲しいかな脂粉の鮮かなるを尚び
或取毀於華粧　或は華粧に毀たれんことを

願わくば、眉のまゆずみとなって、視線の動きにしたがってしずかに上下してみたい。悲しいことには、あざやかなべにやおしろいを大切にして、派手な化粧に消されてしまうだろう。

願在莞而為席　願わくは莞にありては席となり
安弱體於三秋　弱体を三秋に安んぜん
悲文茵之代御　悲しいかな文茵の代り御して
方經年而見求　方に年を経るに求められんことを

願わくばイグサならばむしろとなって、やわらかい体を秋の三か月間、休ませてあげたい。悲しいことには、代わりの華やかなしとねを、年を越せば、欲しいと思うだろう。

願在絲而為履　願わくは糸にありては履となり
附素足以周旋　素足に附きて以て周旋せん
悲行止之有節　悲しいかな行止の節ありて
空委棄於床前　空しく床前に委棄せらるるを

願わくば、絹糸ならばくつしたとなって、素足について、ともに歩んでみたい。悲しいことに、歩みを止めるときが来て、空しくベッドの前に履き捨てられてしまう。

庾信

（五一三～五八一）南北朝時代の文人。字は子山。南朝の梁代に作った華麗な詩文は、父の庾肩吾や徐陵の詩文と共に徐庾体と呼ばれた。

庾信の生涯

梁→西魏→北周→隋

南朝の梁代、父の庾肩吾は高い地位に着いて、朝廷から厚遇されていた。若い庾信は、父と共に、政治の方面でも文化の方面でも梁の国を支えていた。次は、梁代の庾信の作。

「春賦」第六節

玉管初調　鳴絃暫撫　陽春淥水之曲　対鳳迴鸞之舞　更炙笙簧　還移箏柱　月入歌扇　花承節鼓

yù guǎn chū diào　míng xián zàn fǔ　yángchūn lù shuǐ zhī qǔ　duì fèng huí luán zhī wǔ　gèng zhì shēnghuáng　huán yí zhēng zhù　yuè rù gē shàn　huā chéng jié gǔ

玉管（ぎょくかん）初（はじ）めて調（ととの）い　鳴絃（めいげん）を　暫（しばら）く撫（ぶ）す

陽春（ようしゅん）　淥水（ろくすい）の曲（きょく）　対鳳（たいほう）　迴鸞（かいらん）の舞（ま）い　更（さら）に笙簧（しょうこう）を炙（あぶ）り　還（ま）た箏柱（そうちゅう）を移（うつ）す　月（つき）は　歌扇（かせん）に入（い）り　花（はな）は　節鼓（せつこ）を承（う）く

庾信（ゆしん）（『庾子山集注』巻一）

初めに玉管の調子をととのえ
よく鳴る弦を　しばらくかき鳴らす
曲は「陽春（ようしゅん）」か　「淥水（ろくすい）」か
舞は「対鳳（たいほう）」か　「迴鸞（かいらん）」か
笙簧（しょうこう）を熱く吹きならし、
箏柱（ことばしら）を忙しく移してかき鳴らす
月は歌姫の扇の中に入りこみ
花もまた乗ってくるよ、
リズムよく響く太鼓の音に

(yù guǎn chū diào)　(míng xián zàn fǔ)　(yáng chūn lù shuǐ zhī qǔ)
(duì fèng huí luán zhī wǔ) (gèng zhè shēng huáng) (hái yí zhēng zhù)
(yuè rù gē shàn)　(huā chéng jié gǔ)

北朝の西魏の軍隊が刻々と迫ってきた承聖三年（五五四）秋、四十二歳、庾信は追いつめられたような心境の中で、和議の使者として、西魏へと向かった。しかし西魏に着いたときに、祖国の梁は滅んだ。庾信は帰るところが無くなって西魏に囚われの身となった。

擬詠懐詩　其十一（詠懐に擬す詩）　庾信

揺落秋爲氣	揺落　秋　気と為り	(yáo luò qiū wéi qì)
凄涼多怨情	凄涼　怨情　多し	(qī liáng duō yuàn qíng)
啼枯湘水竹	啼いて湘水の竹を枯らし	(tí kū xiāng shuǐ zhú)
哭壊杞梁城	哭して杞梁の城を壊す	(kū huài qǐ liáng chéng)
天亡遭憤戰	天亡ぼして憤戰に遭い	(tiān wáng zāo fèn zhàn)
日蹙値愁兵	日蹙りて愁兵に値う	(rì cù zhí chóu bīng)
直虹朝映墨	直虹　朝　墨に映じ	(zhí hóng cháo yìng lěi)
長星夜落營	長星　夜　営に落つ	(cháng xīng yè luò yíng)
楚歌饒恨曲	楚歌　恨みの曲　饒く	(chǔ gē ráo hèn qǔ)
南風多死声	南風　死声　多し	(nán fēng duō sǐ shēng)
眼前一杯酒	眼前　一杯の酒	(yǎn qián yì bēi jiǔ)
誰論身後名	誰か身後の名を論ぜん	(shéi lùn shēn hòu míng)

【訳】　「阮籍の詠懐になぞらえて」

草木が葉を落として秋の気配が満ち、
物寂しい時節に悲しみの心でいっぱいだ。
涙は湘水の竹を枯らし、
慟哭の声は城壁をもこわしてしまうだろう。
天にほろぼされるときがきて　戦いは怒りに満ち、
太陽が黒くなって　兵は悲しみ嘆いた。
まっすぐな虹が　朝　とりでに映え、
ほうき星が　夜　陣営に落ちて、凶事を暗示した。
故郷の楚の歌声には怨みの調べが多く、
南の国からの音楽には死の声が満ち満ちている。
目の前の一杯の酒を飲みほそう。
後世の名声など誰が気にするものか。

庾信は、西魏の官僚となることを求められたが、西魏に仕える気持にはなれなかった。なぜなら
① 南朝の高い教養をもって育った庾信は、荒々しい北方の文化になじめなかった。
② 庾信は梁室の恩寵をこうむり、梁を慕う気持が強い。
また、儒教の教えから、忠節を第一義と考えていた。
③ 歴史的に見れば、この北朝も、北魏が分裂し、東魏が滅び、北斉と西魏となった。
不安定で、信頼することはできない。

望郷

哀江南賦（江南を哀しむ賦）（『庾子山集注』巻二）（部分）

燕歌遠別　燕歌遠く別れ　(yàn gē yuǎn bié)

悲不自勝　悲しみに自ら勝えず　(bēi bú zì shèng)

楚老相逢　楚老相い逢い　(chǔ lǎo xiāng féng)

泣將何及　泣きて将た何ぞ及ばん　(qì jiāng hé jí)

【訳】北方の燕の歌を聞くにつけ遠い別れが思われ、悲しくてしかたない。故郷の楚の地方からきた老人に出会って、泣いても、もうどうしようもない。

不安

和張侍中述懐（張侍中の述懐に和す）（『庾子山集注』巻三）（部分）

雖欣曲轅樹　曲轅の樹を欣ぶと雖も　(suī xīn qǔ yuán shù)

猶懼雕陵鵲　猶お懼る雕陵の鵲　(yóu jù diāo líng què)

【訳】私は自分が曲轅の無用の木だと喜んでいる。（無用の木なら、切られずに長生きができる。『荘子』の話から。）
それでもなお恐ろしい。あの雕陵での鵲のように、思いがけずに狙われているかもしれない。（『荘子』の話から。）

異郷のやるせなさ　（同じ詩）

農談止穀稼　農談 止だ穀稼　(nóng tán zhǐ gǔ jià)
野膳唯藜藿　野膳 唯だ藜藿　(yě shàn wéi lí huò)
操樂楚琴悲　楽を操らんとするも楚琴悲しく　(cāo yuè chǔ qín bēi)
忘憂魯酒薄　憂いを忘れんとするも魯酒薄し　(wàng yōu lǔ jiǔ bó)

【訳】話すことといえば農事の、ただ穀物の収穫のこと。
食べるものは鄙びた、あかざや豆の葉ばかり。
音楽をかなでようとしても、故国の琴の音は悲しい音色になり、
愁いを忘れようとしても、北国の魯の酒は薄くて酔えない。

無力　（今までの教養が役に立たない）

擬連珠四十四首　其の二十一　（庾子山集注巻七）

吳艘蜀艇、不能無水而浮　呉艘蜀艇、水無くしては浮かぶ能わず
以紅間紫、不能無弦而射　紅間紫を以ても弦無くしては射る能わず

【訳】呉や蜀のすぐれた船も、水がなければ浮かぶことはできない。
紅間紫という百発百中の弓でも弦がなかったら射ることはできない。

落胆　（右の詩の続き）

樊籠之鶴　寧有六翮之期　樊籠の鶴　寧んぞ六翮の期有らん
骯髒之馬、無復千金之價　骯髒の馬復た千金の価無し

【訳】籠の鶴には、二枚の翼をひろげて大空に飛び立つ時はこない。
（千里を駆ける駿馬でも）死んで骨になった馬には千金の価値はない。

庾信は西魏に出仕することを拒否し、隠逸を望んだ。

擬詠懐詩　其二十　（詠懐に擬す詩）

在死猶可忍　死に在るも　猶お忍ぶ可く　(zài sǐ yóu kě rěn)
為辱豈不寛　辱め為るるも豈に寛からざらん　(wéi rǔ qǐ bù kuān)
古人持此性　古人　此の性を持すも　(gǔ rén chí cǐ xìng)
遂有不能安　遂に安きこと能わざる有り　(suì yǒu bù néng ān)
其面雖可熱　其の面　熱す可しと雖も　(qí miàn suī kě rè)
其心長自寒　其の心　長く自ら寒し　(qí xīn cháng zì hán)

【訳】　「阮籍の詠懐になぞらえて」

死に際しても、なおよく屈辱に耐え、
どんなに辱められても、つねに寛大にしていたという。
昔の人は、こうした気概を堅持していても、
結局は、穏やかでいられないこともあっただろう。
その顔は屈辱で熱くなっていたかもしれないが
その心はとこしえに、冷たく冷えていたのだ。

しかし、あしかけ三年の苦悩の後、次第に、自分の運命を受け入れざるを得ないと思うようになっていった。

この時代の西魏の指導者、宇文泰（505 年―556 年）は、北魏・西魏の政治家として活躍し、北周の基礎を築いた。実際に帝位には就いていないが、つねに人々に敬慕されてやまぬ仁徳の指導者であった。すぐれた指導者宇文泰にであって、庾信の考え方も、次第に変わっていった。

庾信は悲嘆の淵に沈みながらも、腐敗し老朽した南朝の体制と、後の隋や唐といった帝国に連なる、より開明な北朝の体制への歴史的潮流を理解し、それへの参与を知識人としての自己の責務と受け止め、前向きに新政権に協力していった。

このころ、庾信の作品は、流麗で妖艶な南朝時代の作風から、次第に勇壮なものに変わっていった。

和王内史従駕狩

（王内史の駕に従いて狩すに和す）（『庾子山集注』巻四）

冬狩出離宮　冬狩（とうしゅ）　離宮（りきゅう）を出（い）で　(dōng shòu chū lí gōng)
還過猟武功　還（ま）た過（よぎ）り　武功（ぶこう）に猟（りょう）す　(hái guò liè wǔ gōng)
澗横偏礙馬　澗横（たによこ）たわり　偏（ひと）えに馬（うま）を礙（さえぎ）り　(jiàn héng piān ài mǎ)
山虚絶響弓　山虚（やまむな）しく　絶（はなは）だ弓（ゆみ）を響（ひび）かす　(shān xū jué xiǎng gōng)
更嬴承落雁　更嬴（こうえい）は　落雁（らくがん）を承（う）け　(gēng yíng chéng luò yàn)
韓盧闘蟄熊　韓盧（かんろ）は　蟄熊（ちつゆう）と闘（たたか）う　(hán lú dòu zhé xióng)
猶開三面網　猶開（なおひら）く　三面（さんめん）の網（あみ）　(yóu kāi sān miàn wǎng)
誰肯一山重　誰か肯（うべな）わん　一山の重きを　(shéi kěn yì shān zhòng)

【訳】　王内史の「駕に従いて狩をする」詩に唱和する

冬の日に、狩のために離宮を出発し、
また武功の地に立ち寄って猟をする。
谷川は横ざまに流れて、険しく馬の行く手をさえぎり、
葉が落ちた山に、大きく弓音が響いた。
更嬴のような名人が、見事に射落とした雁を受け止め、
韓盧のような名犬が、冬ごもりから出てきた熊と戦った。
しかし獲物を囲う網の三面は開かれて逃げ道が作られていた。
このような寛大な心は、山よりも重いと、誰もが思うに違いない。

天和六（五七一）年の戦いには庾信も従軍した。その時の作品。実戦の経験によって、庾信の作品はますます勇壮なものになっていった。

同盧記室従軍　（盧記室と同に従軍す）（『庾子山集注』巻三）（部分）

連烽対嶺度　　連烽　嶺に対して度り　　(lián fēng duì lǐng dù)

嘶馬隔河聞　　嘶馬　河を隔てて聞こゆ　　(sī mǎ gé hé wén)

箭飛如疾雨　　箭　飛びて　疾雨の如く　　(jiàn fēi rú jí yǔ)

城崩似壞雲　　城　崩れて　壞雲の似し　　(chéng bēng sì huài yún)

【訳】　盧記室と一緒に従軍する」

烽火の続く煙が嶺に向かって流れていき、

馬のいななきは河を隔てて聞こえてくる。

飛ぶ矢は　速い雨のようで、崩れる城は　砕ける雲のようだ。

蒲州刺史中山公許乞酒一車来送　　（『庾子山集注』巻四）

（蒲州刺史中山公、（余に）酒一車を乞うを許されるも、未だ送らず）

細柳望蒲台　　細柳より　蒲台を望めば　　(xì liǔ wàng pú tái)

長河始一迥　　長河　始めて一迥す　　(cháng hé shǐ yì jiǒng)

秋桑幾過落　　秋の桑は　幾たびか過落するも　　(qiū sāng jī guò luò)

春蟻未曾開　　春の蟻は　未だ曾つて開かず　　(chūn yǐ wèi céng kāi)

瑩角非難馭　　瑩角　馭し難きに非ず　　(yíng jiǎo fēi nán yù)

槌輪稍可催　　槌輪　稍か催す可し　　(chuí lún shāo kě cuī)

只言千日飲　　只だ言う　千日の飲は　　(zhǐ yán qiān rì yǐn)

旧逐中山来　　旧くより中山を逐って来たる　　(jiù zhú zhōng shān lái)

【訳】「蒲州刺史中山公が酒をくれるというのに、酒を載せた車がまだ
送られてこない」
細柳（さいりゅう）よりそちら　蒲台（ほだい）を望めば
あの黄河が初めて大きく曲がる所が見えます。
秋の桑」はもう何度落ちたことやら、それなのに
春（はる）の蟻（あり）」という　うま酒は　まだ蓋（ふた）を開けてもいないようだ。
酒を載せた荷車を引く牛を御すのは難しくないでしょう、
車輪をもう少し急がせてくださいな。
千日飲み続けるという豪快な宴会をやるためには
昔から、中山から酒が来ることに決まっているのです。

ユーモアを交えた調子で、中山公に中山酒（千日酔うという名酒）の催促をしたもので、庾信が北方の土地にも生活にも馴染んでのびのびと暮らしている様子がわかる。

宣政元年（五七八）六月、北周の武帝は突厥討伐の途中、病のために突然亡くなった。以後、北周は落日が沈むように急速に衰退していき、隋が台頭してきた。

開皇元年（五八一）二月、楊堅が北周からの禅譲を受けて、隋王朝が誕生する。

同じ年の秋または冬、庾信は死んだ。享年六十九歳。本官の司宗中大夫を追贈され、荊雍二州刺史を加えらた。

参考図書　『越境する庾信』加藤国安著　研文出版

人知れず死んでいった名も無い騎士、人生と正面から向き合った陶淵明、波瀾に満ちた生涯を全うした庾信。

これまでに生きた無数の人々の中に、私たちはきっと共感する友を見いだすことができるでしょう。

もっともっと多くの人々と出会い、彼らの人生をより深く理解してみたいと思うのです。

また、いつか、一緒に新しい旅へ出発しましょう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「漢詩入門（漢詩の歴史）」　市川桃子

毎月　第一土曜日　十一時

毎日文化センター（東西線　竹橋駅）

電話　０３（３２１３）４７６８

「李白を読む会」　市川桃子

毎月　第四金曜日　一時

湯島聖堂　（JR　御茶ノ水駅）

電話　０３（３２５１）４６０６